

ソクラテスに関する「四つの難題」

第二部

ソクラテスの「没我的思考」

目次

ソクラテスに関する「四つの難題」

第二部

②ソクラテスの「没我的思考」

- 一、 二つの「思考方法」
- 二、 書物との対話
- 三、 本来の「哲学的問答法」
- 四、 大学生の場合
- 五、 車の両輪
- 六、 智を生めない者
- 七、 結び

ソクラテスの「物想い」

* 参考文献

ソクラテスの「没我的思考」

ソクラテスの「没我的思考」について

それは、プラトンの『饗宴』という著作のなかに出てくるものであり、その内容は、次のようなものである。――つまり、前四一六年に、アガトンというまだ若い悲劇作家が、いわゆる「悲劇コンクール」で見事に優勝したので、それを祝うための祝宴が、アガトン邸で開かれることになり、その祝宴にソクラテスも招待を受けていた。そこで、ソクラテスは、彼には珍しく「沐浴^{ゆあみ}あがり」にサンダルを履^はいた」かつこうで、その宴に出かけて行くところにいるところに、ちょうどアリストデモスという人とひよっこり出逢うことになり、それじゃあと、ソクラテスは、彼（アリストデモス）を誘って、二人でアガトン邸へと向かうことになるわけである。

そして、その道の途中で、次のようなことが起こるわけである。つまり、「……まあ、こういったことを話しあってから、ぼくらは出かけたわけだ。ところが、ソクラテスは、途中で、なにか考^{かん}えごと^{ごと}にふけて、遅れてしまい、ぼくのうしろのほうを歩いている。で、ぼくが待っていると、さきに行ってくれ、と頼むのだった……」。そこで、アリストデモスは、一人でアガトン邸に着き、それから召使いに案内されて、中に入って行くと、アガトンが、「……おお、アリストデモス！ これはちょうどいいところに来てくれた。さあ、いっしょにご馳走を食べよう」と言いながら、「……それにしても、どうしてソクラテスを連れて来てくれなかったのかね？」と尋ねると、いや、実はソクラテスに誘われて、一緒にやって来たのだが、一体、どこにいるのだろうということになり、そこで、アガトンは、召使いにソクラテスを探してお連れするように告げ、やがて、その召使いが帰って来て、次のように伝えるわけである。「……ソクラテスさまはあそこで、隣の車寄せのなかにひっこんでしまつて、そこにたたずんでおられます。わたしが呼びしましても、来ようとはなさりません。……」

それを聞いたアガトンは、「……おかしい話だな、まったく。まあいい、ともかく、あの方をお呼びしてくるのだ」と言ったので、アリストデモスは、「……いや、それはよしとくれ。あの人は、そのままにしておいてやってくれ。あれは、あの人の癖の一つで、ときどき、どこでもおかまいなしに、道を逸^それては入りこみ、そこにたたずんでしまうのだよ。どのみち、すぐここにやって来るだろう。ぼくはそう思う。だから、邪魔を入れないで、そっとしておいてやってくれたまえ。……」という言葉を受け入れて、アガトンとその招待客たちは、みんなでご馳走を食べはじめることになるわけだ。

ところで、問題のソクラテスは、いつもほど長い道草はくわず、食事が半分ほどすんだころにやって来た。そこで、アガトンは、たまたまいちばん末席に一人で横になつていたので、彼に言った。「……どうぞこちらへ、ソクラテス、ぼくの隣りに横になりたまえ。そのおまけとして、あなたのからだに触れることによって、あの車寄せであなたに訪れた知恵を、ぼくにも享^うけさせてくれたまえ。あなたがそれを、そのとき見つけたして、げんにいまもっていることは、言うまでもないことだからね。でなかったら、あなたは、そのままそこを立ち退^のくなど、どうしてするものですか。……」（『饗宴』175）

*

*

さて、引用が長くなったが、しかし、この引用部分には、極めて興味深いものがあるので、それについて、少し考えてみたいと思う。まず、アガトン邸へと向かうその途中で、

ソクラテスは、「……なにか考えることにふけて、遅れてしまい、ぼくのうしろのほうを歩いている。で、ぼくが待っていると、さきに行ってくれと頼むのだった。……」という箇所がある。この部分は、道を歩いている途中で、ソクラテスの「頭の中」に何か「ある思いなり考えなり」が浮かんできたということであり、それ自体は、なにも不思議なことではなく、誰にもよくあることではないかと思う。そして、その「思いなり考えなり」に気を奪われれば、当然のことながら、その歩む足の速度も遅くなってくるわけである。そこで、その遅れたソクラテスを待っていると、「……さきに行ってくれと頼むのだった」ということになるわけだ。

ここまでのところに、それほど不自然なところは特にないように思うが、しかし、ここで留意しなければならないことは、次のようなところからである。——つまり、ソクラテスは、アガトンの邸での祝宴に向かう途中であるにもかかわらず、そのようなことはすっかり忘れてしまったかのよう、やがて、「……車寄せのなかにひっこんでしまい、そこでずっとたえずみながら、いわゆる『没我的思考』に入ってしまった」ということである。しかも、アガトンの召使いが、お呼びしましても、「……来ようとはなさりません。……」ということになるわけだ。

これは、一体、どういうことを意味しているのだろうか？——まず、考えてみなければならぬことは、ソクラテスの「頭の中」に浮かんできた「ある思いなり考えなり」というものは、一体、どういうものかということである、つまり、ソクラテスにとつてごく当たり前の「思いなり考えなり」であれば、何もわざわざ立ち止まってまで、いわゆる「没我的思考状態」に深く入っていく必要性などどこにもなかっただろう。というのも、もしごく当たり前の「思いなり考えなり」の時には、いちいち立ち止まって、「もの思いに耽ってしまう」というのであれば、ソクラテスは、年がら年中（毎日毎日）、絶えず立ち止まって「もの思い」に耽っていなければならないことになるからである。それゆえ、ソクラテスの「頭の中」に浮かんできた「ある思いなり考えなり」というのは、ソクラテスをわざわざ立ち止まらせて、深い「思考（思索）状態」（つまり「沈想」状態）にまで耽（ふけ）らせるだけの何か「魅力的なもの（或いは興味や関心をそそられるもの）」でなければならぬだろう。

ソクラテスのようにいろいろな「問題」（特に人間の諸問題）について絶えず「ものを考えている」ような人間の「頭の中」には、いつもそれらに対する様々な「疑問や問題点」などが数多く蓄えられているものである。——それは、例えば、敬神とは何か、不敬とは何か、美とは何か、醜とは何か、正とは何か、不正とは何か、思慮とは何か、狂とは何か、勇とは何か、怯懦とは何か、国家とは何か、為政者とは何か、政府とは何か、統治者とは何か、その他、そういう問題をいつも数多く蓄えていると同時に、そのような問題自体が、そもそもどれもこれもすぐに答えが得られるような問題ではなく、また、たとえある「答えや結論」などを得たとしても、やがて、その「答えや結論」に対して幾つかの「疑問や問題点」などが生じてきて、さらにいろいろな角度からその「答えや結論」をより厳密に吟味（検討）し直して、新たな「答えや結論」などを出すというようなことを、何度も何度も繰り返し行なわざるを得ないものである。

それゆえ、ソクラテスの「頭の中」には、いつも様々な「疑問や問題点」などが数多く蓄えられていたということになる。そして、そのような様々な「疑問や問題点」などにつ

いて、意識的にしろ、あるいは、知らず識らずのうちにしろ、あれこれ考えているうちに、ふと何らかのきっかけから、その「疑問や問題点」などがうまく解けるような「考えや着想（ヒント）」などが、ふと浮かんで来ることがよくあるわけである。そのような時には、その人自身思いもかけないような魅力的な「考えや着想（ヒント）」などを得て、少なからず心がときめく（高揚）して来るのを感じながら、その魅力的な「考えや着想（ヒント）」などをもとにして、徹底的に考えを深めていくことによって、今までどうしても（或いはなかなか）思うように解けなかった「難題」などが、一気に解決されることがよくあるわけである。それが、すなわち、「直知・直観」であり、そのようにして実に様々な人類的な「発明、発見、創造、その他」などがなされてきたということである。

例えば、ニュートンは、リンゴの木の実が落ちるのを見て、いわゆる「万有引力の法則」を発見したという（その真偽はともかく）、非常に有名な逸話（エピソード）が残されているわけであるが、それも、もともとニュートンの「頭の中」には、力学、その他に関する様々な「疑問や問題点」などが常に蓄えられていて、それらについて、いつも真剣に考えていたからであろう。そして、そのような力学、その他に関する様々な「疑問や問題点」などを何とか解明しようと本格的な「思考（思索）活動」を無限に積み重ねていくうちに、ある日、ある時、ふとした何らかのきっかけからも、「あつ、そうか！」というような感じで、その人自身にとつても思いがけないような魅力的な「考えや着想（ヒント）」などがふと浮かんで来て、一気にその「難題」が解決されることにもなるということである。

それと同じように、ソクラテスの「頭の中」には、いつも人間の諸問題に関する様々な「疑問や問題点」などが数多く蓄えられていて、それらについて、いつもあれこれ考えているような「精神状態」だったろうと思うが、そのようなソクラテスであつてみれば、何かの途中でふと思ひもかけないような魅力的な「考えや着想（ヒント）」などが浮かんで来ることも、かなり頻繁にあつたのではないかと思う。そのような時には、ソクラテスは、そのままその場にたたずむような状態になって、いわゆる「没我的思考」（つまり「沈想」状態）に深く溶け入ってしまうという癖があつたということである。——それでは、その癖は、一体、どういうことを意味するのかと言えば、それは、取りも直さず、ソクラテスにとつて何か魅力的な「考えや着想」などに襲われた時は、何よりもそれを最優先させる、という「思考（思索）第一主義」（或いは真理探究第一主義）の真の愛知者（つまり真知を愛し求めてやまない人）であつたということになるわけである。

ふつう、われわれの場合は、何かの途中で思ひもかけないような魅力的な「考えや着想（ヒント）」などが浮かんで来た時には、それを忘れないようにすぐに何かメモ帳などに書き留めておき、そして、あとでそのことについてあらためて「考え直す」ということをよく行なったりするものである。ところが、ソクラテスの場合には、何らかの途中で思ひもかけないような魅力的な「考えや着想（ヒント）」などが浮かんで来た時には、それを何か紙（パピルス）などに書き留めて、あとでそれを「考え直してみる」というような方法を採らずに、その場でもうどんな考え深めていき、そして、例の「没我的思考」（つまり「沈想」状態）に深く溶け入ってしまうわけである。つまり、ソクラテスの場合には、ある魅力的な「考えや着想」などが浮かんで来た時には、どこでももうおかまいなしに、道を逸（そ）れては入りこみ、そこにたたずみ、そして、そのずっと立ったままの状態でどんなものを考え深めていき、そして、何らかの結論が得られるまでは徹底的に「考え続け」

て、中途半端なところでは「決してやめない（或いはやめられない）」という最大特徴があったわけである。そうでなければ、どうしてもあのように極端に長い時間ずっと立ち続けるということが起こり得るだろうか、起こりようがないのである。つまり、中途半端なところで思索をやめるということができないからこそ、あのよう極端に長い時間ずっと立ち続けるようなことになってしまうということである。

このソクラテスの「集中力」（思索的集中力）には、何人並みはずれたところがあったに違いない。そうでなければ、その場にそのまま立ちつくして、あのような「没我的思考状態」を何時間（時には何十時間）も続けられるはずもないからである。——つまり、ひとたび「思考（思索）状態」に入ったならば、ソクラテスの場合には、まわりのことはあまり（或いはほとんど）気にならなくなってしまう、その「思考（思索）活動」に深く没頭し続け、そして、何らかの結論（つまりソクラテス自身、もうここまででよいだろうと納得のいくような地点まで）到達するまでは、徹底的に「考え続け」て、中途半端なところでは「決してやめない（或いはやめられない）」という、極めて強い「精神力」（思索的集中力）を持ち合わせていたことになる。そうでなければ、何も長い時間ずっと立ちつくして、「物思い」に耽り続ける必要などなく、適当なところでやめて、あとは自分の家に帰ってから、じっくり考えても少しも構わないわけである。ところが、ソクラテスの場合には、そういうところが全くなかったということである。それは、最初の引用文のなかにも、次のような形で記述されているものである。つまり、「……どうぞこちらへ、ソクラテス、ぼくの隣りに横になりたまえ。そのおまけとして、あなたのからだに触れることによって、あの車寄せであなたに訪れた知恵を、ぼくにも享けさせてくれたまえ。あなたがそれを、そのとき見つけたして、げんにいまももっていることは、言うまでもないことだからね。そうでなかったら、あなたは、そのままそこを立ち退くなどどうしてするものですか。……」（『饗宴』175）

一、二つの「思考方法」

さて、ソクラテスには、大きく分けて、次の二つの本格的な「思考（思索）方法」があったということである。——その一つは、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を積み重ねることによって、物事の（特に人間の諸問題）の「真実、真理、その他」などを徹底的に探究するという方法である。そして、もう一つは、逆に、他人から離れて、一人きりになり、そして、いわゆる「没我的思考状態」（つまり「沈想」状態）に深く溶け入っては、物事の「真実、真理、その他」などをどこまでも深く探究するという方法である。——前者は、ソクラテスの有名な「対話（吟味）活動」（つまり「哲学的問答法」）であり、後者は、いわゆる「自問自答の世界」（つまり「没我的思考」方法）である。そして、この「二つの方法」は、極めて対照的なものになるわけである。

というのも、前者は、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を積み重ねるのに対して、後者は、全く正反対に、他人から完全に離れ、一人きりになり、孤独「物思い」に耽入するという方法だからである。すなわち、ソクラテスにはいろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」をしている時の非常によく知られている姿と、もう一つ、これは意外と忘れられがちであるが、他人から完全に離れ（つまり他人の介入

を全く寄せつけず)、一人きりになって、いわゆる「没我的思考状態」(つまり「沈想」状態)に深く溶け入っている姿という、この二つの姿があったということである。

そして、前者の場合には、ソクラテスが、一体、どういう内容のことを話していたかは、それを直接、見聞きしている人たちには、よく知られていたものであるが、しかし、後者の方は、ソクラテスが、一体、どういう内容のことを「瞑想(思索)」していたかは、誰にも分からないものである。とは言え、何も特別のことを考えていたはずもなく、やはり、恐らくは「人間の諸問題」に関する様々な「疑問や問題点」などをより深く考えていたことになるのだろう。あるいは時には「自然の問題」についても考えていたかも知れない。ただ、それは、ソクラテス自身の内部に留まり、他人との対話(議論)の題目とはしなかったということもあり得ないことではない。というのも、ソクラテスほどの知的好奇心の旺盛な人であつてみれば、何かの折りに、自然の問題についても孤独^{ひとり}考えることがあつても何も不思議なことはないからである。また、『パイドン』という著作のなかで、作中のソクラテスは、――若い時に、驚くほど「自然の問題」に熱中することがあつたが、やがて、それに失望して、あるいはその研究が自分には向いていないということから、いわゆる「人間探究」に専念するようになったということも、十分に考えられることである。

それはともかく、ソクラテスには、いわゆる二つの「思考(思索)方法」があつたということである。(むろん、本来ならば、それに加えて、もう一つ、「ものを書きながら考える」という方法があるかと思うが、ソクラテスの場合には、それをほとんど行なっていない)。逆に、プラトンの場合には、一生涯、それを行なった人である。さて、ソクラテスにとって、その二つの「思考(思索)方法」には、一体、どのような「違い(或いは特徴)」があつたのだろうか? この問題についても、少し考えてみたいと思う。

まず、他人と直接「対話(議論)」をすることによって得られる利点には、一体、どのようなものがあると言うのだろうか? まず、考えられることは、やはり、一人で思考(思索)している時には、どうしても「独断」(一人よがりの世界)に陥りやすいものである。一方、相手と直接「対話(議論)」を積み重ねていく場合には、何かおかしなところや間違つたところがあれば、それをすぐに相手から指摘されるので、その点、一人よがりの「独断」に陥ることが少ないとともに、対話相手には、自分とはまた違つた「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、そして、様々な体験や経験、その他」などを持ち合わせているわけであるから、それらに触れることによって、「ああ、なるほど、そういうものの見方、とらえ方、考え方、あるいは生き方もあるんだなあ」という感じで、新しい刺激を受けることも多くなるわけである。それゆえ、いろいろな分野(領域)の人たちと親しく「対話(議論)」を積み重ねることは、とかく自分よがりの狭い「ものの見方、とらえ方、考え方、あるいは生き方」に深く陥りやすい状態から脱却して、いろいろな角度から物事をとらえ、考えられるようになるということである。

ところで、ソクラテスが実際に行なっていた「対話(吟味)活動」(つまり「哲学的問答法」とは、一体、どういうものかと言えば、それは、例えば、正義とは何か、勇氣とは何か、あるいは不正とは何か、というように、ある「題目(テーマ)」について、対話相手と直接「一問一答の形式」でいろいろな角度から、その問題について、お互いに「対話(議論)活動」をどこまでも徹底的に深めていき、そして、何とかして「最終的な答え」(つまり「真知」)を得ようとするためのものであるが、しかし、実際にはなかなか「最

最終的な答え」（つまり「真知」）が思うように得られずに、多くは「行き詰まり状態」で終わってしまうことが非常に多かったということである。

とくに晩年のソクラテスは、毎日のように、朝早くから遊歩道や体育場、また、人が多く集まる広場（市場）や街頭、その他、もういたるところに出かけて行つては、一日じゅう、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」（つまり「哲学的問答法」）を行なうことを、いわば毎日の日課のようにしていたわけである。それでは、なぜ、そのようなことを行なっていたのかと言えば、それは、もちろん、物事（特に人間の諸問題）の「真実、真理、その他」などを徹底的に探究するためであつたとともに、もう一つは、お互いの「知の状態」をできるだけ厳密に吟味し合い、そして、若しも相手の人が「知者」でもないのに、何か「知者」でもあるかのように思い込んでいるようなならば、そうではないのだということを（つまり相手の「無知」＝様々な思い違い）などを、はっきりと自覚させるためであつたということである。

例えば、相手の人が「勇氣について」よく知っていると考えているようならば、ソクラテスは、その人と「勇氣の問題」について積極的に「対話（吟味）活動」を行なっていくわけだが、その場合、ソクラテスは、いろいろな角度から「相手の答え」の矛盾点を徹底的についていき、そして、相手の人がついに「答えに窮する状態」（つまり「行き詰まり状態」）にまで追い込むことによつて、相手の「無知」を自覚させるという方法である。それゆえ、ソクラテスが実際に行なっていた「対話（吟味）活動」（つまり「哲学的問答法」というのは、相手の「無知」を自覚させるための方法としては、非常に有効なものではあるが、しかし、一方、いわゆる「勇氣とは何か」という「最終的な答え」（つまり「真知」）を得ることに、むしろ失敗をしていることになるのである。

それでは、なぜ、相手との直接的な「対話（吟味）活動」では、なかなか思うような「最終的な答え」（つまり「真知」）を得ることができにくいのだろうか？ 例えば、ある「題目（テーマ）」をもとに、よくいろいろな「討論会」などが開かれたりするが、そのような場合にも、各人がそれぞれ「自分の考え」を言い合うばかりで、なかなか「最終的な答え」は得られないままで終わってしまうことが非常に多いわけである。もちろん、それにもいろいろな理由があるかと思うが、その一つの理由としては、もともとその「題目（テーマ）」そのものが、これという「最終的な答え」を得ることが極めて難しい（或いは「ほとんど不可能に近い」）ものであるということもあるのだろう。

そして、もう一つの大きな理由としては、次のような極めて大事な問題が含まれているのである。つまり、他人との直接的な「対話（議論）活動」というのは、お互いにいろいろな角度から徹底的に「対話（議論）活動」を積み重ねながら、その「議論」を先へ先へと詰めていき、そして、終には「最終的な答え」（或いは「最終的な結論」）をなんとか得ようとするものである。――それは、例えば、長い階段を一步一步上りつめていき、そして、その階段を上りつめたところに、いわゆる「最終的な地点」（或いは「最終的な答え」）があつて、そこに何とか辿り着こうという試みにも似たものである。ところが、実際には、そのような他人との「対話（議論）活動」では、なかなか「最終的な地点」（或いは「最終的な答え」）へは辿り着けないことが非常に多いわけである。

それでは、なぜ、そのようなことになるのか？ もちろん、それにもいろいろな理由があるかと思うが、その大きな理由の一つとして、それは、他人との「対話（議論）活動」と

いうのは、最初から最後まで、あまりにも意識的かつ「論理的（知性的）思考」だけに終始しているために、どうしても越えられないある限界が生じてくるからである。それゆえ、なかなか「最終的な答え」（つまり「真知」）を得ることができにくいという、いわゆる「行き詰まり」という状態に深く陥ってしまうことが非常に多いわけである。

それでは、どうしたらわれわれ人間は、それらの「行き詰まり状態」を打開し、突破して、最終的な「答え」（つまり「真知」）をとらえることができ得るのかと言えば、それこそ、ソクラテスが実際に行なっていた、もう一つの「思考（思索）方法」である、あの例の「没我的思考方法」（つまり「沈想」状態）に深く溶け入って、物事の「真実、真理、その他」などを、まさに「直知・直観」するという方法なのである。

つまり、他人との「対話（吟味）活動」というのは、いわゆる「論理的（知性的）思考」方法であるのに対して、もう一つの「没我的思考方法」（つまり「沈想」状態）というのは、むしろある種の「超論理的（超知性的）思考」方法であり、それこそ、まさに「直知・直観」というものをもたらすものである。そして、他人との「対話（吟味）活動」というものは、まさに一步一步階段を上って行き、そして、最終的に或る「真実・真理」へと到達しようとする方法である。むしろ、そのような方法でも或る「真実・真理」をとらえることはでき得るだろうが、しかし、多くの場合、そのような方法だけでは無理があり、それは、例えば、或る「難題」に対して、長い間、ああでもないこうでもないという感じで、意識的かつ「論理的（知性的）思考」を何年も積み重ねながらも、なかなか思うような答えを見い出せず、悶々としている「心的状態」にも似ていて、そのような「行き詰まり状態」を越えるためには、むしろ独りぼんやりと「物想い」（あるいは「空想」を樂しむ）ような、まさに「没我的思考方法」（つまり「沈想」状態）に深く溶け込んでいく「心的状態」になっような時にこそ、ある日、ある時、ふとした何気ないきっかけから、「あつ、そうか！」と、想いもかけないような感じで、長い間、どうしても解き得なかった「難題」が、一気に解けるような決定的な「着想やヒント」などを得ることがよくあるが、それこそは、まさに「直知・直観」というものになるということである。

もちろん、そのどちらの「思考（思索）方法」も極めて大事なものであるとともに、それはもう切っても切れないほどの極めて親密な「クルマの両輪」のごとき関係なのである。ただ、実際にわれわれ人間が或る「真実・真理」をとらえるのは、ほとんどの場合、他人との直接的な「対話（議論）活動」などによってではなく、もちろん、そういう場合もあるだろうが、しかし、それは、あまりにも「論理的（知性的）思考」に終始するがゆえに、いわゆる「精神の飛翔」というようなものが起こりにくい「心的状態」なのである。つまり、或る「真実・真理」をとらえるためには、階段を一步一步上りつめて行くような「論理的（知性的）思考」方法だけでは、どうしても越えられないものがあり、その越えられないものを越えて、或る「真実・真理」を一気にとらえるためには、どうしても「精神の飛翔」というようなものが必要不可欠になって来るということである。そして、その「真実・真理」をとらえるための「精神の飛翔」というようなものをもたらすものが、まさに「没我的思考方法」であり、そのような「沈想状態」に深く溶け入っているような時にこそ、ある日、ある時、ある何らかの「切っ掛け」から、一気に、或る「真実・真理」などを「直知・直観」することが非常に多いということである。そして、そのような「没我的思考状態」から、いわゆる「精神の飛翔」というようなものが生じて来て、或る「真実・

真理」などを一気にとらえるというものこそ、他人と直接的な「対話（議論）活動」などを行っているような時の、いわゆる「論理的（知性的）思考」方法を超えて、ある種の「超論理的（超知性的）思考」方法になっている状態なのである。例えば、ゲーテは、次のようなことを言っている。「……偉大なものは、純真で、ひたむきで、夢遊病者のような創造力によってのみ産み出されるものである。……」と。（「ゲーテとの対話」下）

それゆえ、われわれ人間が、物事の「真実・真理」をとらえるのは、いわゆる「論理的（知性的）思考」の無限の積み重ねをその大きな基盤としながらも、それだけではどうしても越えられないものがあり、それに加えて、自問自答による「没我的思考方法」（つまり「沈想」状態）にどこまでも深く溶け入ることによってこそ、まさに「精神の飛翔」というようなものが生じてきて、ある日、ある時、思いもかけないような感じで、未だ解明されていない人類の「難題」（難問）の或る「真実・真理」などを、その人の「思惟界」で、まさに「直知・直観」することができ得るということである。

それゆえ、物事の「真実・真理」を得んがための「哲学的問答法」というのは、一般には、他人との直接的な「対話（吟味）活動」のことだけになっているが、しかし、実際には、もう一つの自問自答による「没我的思考方法」も、自分を相手としての「哲学的問答法」であり、それゆえ、物事の「真実・真理」を得んがための「哲学的問答法」というのは、それら両者を合わせ（合体させて）こそ、初めて、成立可能となるものであるとともに、ソクラテスが実際に行なっていた「真知」を愛し求める「愛知学（哲学）」（その手段としての「哲学的問答法」）というのは、まさにそれら「両者」（つまり他人との「対話」と自分自身との「対話」）との合体からこそ、成り立っていたということである。

二、書物との対話

それに加えて、例えば、誰かの「書物」を深く読むというようなことも、直接、相手と「対話（議論）活動」を行なうものではないが、しかし、間接的には、相手の「考えや思想」（いわば「魂」）とも深く交わることになるので、それも極めて「広い意味」においては、一つの「哲学的問答法」ということになるのかも知れない。

例えば、或る優れた人物の「考えや思想」というものを、ほんとうに知りたい（或いは疑問を解決したい）と思うならば、その優れた人物と直接、会って、その人という親しく「対話（議論）活動」を積み重ねながら、直接、相手からそれらについて聞くのが一番よいことになる。しかし、そのようなことが思うようにできないならば仕方がない、まさに「次善の策」として、その人が「書いたものを読む」ほかはないのである。

例えば、ソクラテスやプラトンの「考えや思想」というものをほんとうに知りたいと思うならば、直接、ソクラテスやプラトンなどに会って、その人たちと納得がいくまで「対話（議論）活動」を何度も積み重ねることによって、ソクラテスやプラトンが、一体、どのような「考えや思想」を持っていたのかを、直接、聞くことができるわけだから、それこそは、まさに「最上（最善）のもの」になるわけである。

しかし、ソクラテスやプラトンなどは、すでに二千数百年も前に死んでいるので、直接、会って、彼らから直接話を聞くということはもうでき得ない。それゆえ、われわれは仕方なく（つまり「次善の策」として）、プラトンやその他の人たちが書き遺した「著作（文

献」などを通して、ソクラテスやプラトンの「考えや思想」というものにめぐり逢い、そして、それをできるだけ厳密に理解しようとしているのである。そして、例えば、プラトンの数多くの「著作」を深く読み進んでいくうちには、この部分は、一体、どういう意味なんだろうか、また、ここは、どういうつもりで、このように書いたのだろうか、よく理解できない部分や分かりにくい部分などがいろいろと出てくることになる。それゆえ、プラトンが生存していれば、そのプラトンに実際に会って、「この部分は、一体、どういう意味なんですか？」と、納得がいくまで「対話（議論）活動」を積み重ねて、徹底的に聞くことができ、その結果として、「ああ、なるほど、私は、今まで違ったふうに理解していたが、しかし、実際は、そういう意味だったのですか」と、相手の「考えや思想」というものを、可能な限り、「正しく理解する」ことができ得るということである。

ところが、一方、「書物」というのは、こちらからいくら相手に問いかけても、いつも「同じ言葉」でしか返ってこないとともに、少しもこちら側の「疑問や質問」などに答えはくれないものである。そのために、たとえ同じプラトンの「著作」を読んでも、各人それぞれによって実に様々な「理解の仕方や解釈」などが無数に生じてきて、一体、プラトンは、本当はどういうことを言おうとしていたのか、その「真意」がいつまでも「曖昧のまま」になってしまふとともに、ひどい時には、作者の「真意」とはまったく正反対の意味で理解してしまうというように、読者に「中途半端に読まれた」のでは、作者の「真意」は、少しも「正しく伝わらない」という危険性も非常に高いわけである。しかも悪いことには、その読者自身は、何一つ厳密には「正しく理解」していないにもかかわらず、もうその作者の「考えや思想」というものを、何もかも理解したような気持ちになって、自分は、すでにいろいろなことを知っている「知者」でもあるかのように自惚れてしまうという「二重の危険性」があるということである。それこそ、まさに「書物」というものがもたらす最大の欠点の一つになるかと思う。

それに加えて、もう一つの大きな欠点は、そもそも「書物」というものの中に書かれている内容というものからして、まさに生きた「言葉や知識」の「影」（つまり硬直化した「言葉や知識」に過ぎないということである。しかも、「……ひとたび書きものにされると、どんな言葉でも、それを理解する人々のところであろと、ぜんぜん不適當な人々のところであろとおかまいなしに、転々とめぐり歩く。そして、ぜひ話しかけなければならぬ人々だけに話しかけ、そうでない人々には黙っているということができない。あやまって取りあつかわれたり、不当にののしられたりしたときには、いつでも、父親である書いた本人のたすけを必要とする。自分だけの力では、身をまもることも自分をたすけることもできないのだから」(275E)と、プラトン自身、『パイドロス』という著作のなかで特に強調しているところである。――つまり、「書物」というものの最大の欠点は、相手との直接的な「対話（吟味）活動」のように、その相手の「知の状態」に応じて、いくらでも臨機応変に一問一答の形式で、相手の人がほんとうに理解できるまで親身になつてとんとん生きた言葉を交えながら、親しく「対話（吟味）活動」を何度も積み重ねるようなことが少しもできないとともに、どのような人間に対しても、すべて同じ方法である一つの硬直化した「同じ言葉」で語りかけるだけであり、しかも、こちら側からの「質問や疑問」などには、なにひとつ答えてくれないというところにあるわけである。

一方、他人との直接的な「対話（吟味）活動」というのは、何よりも「生きた人間」と

「生きた人間」との直接的な「関わり（交わり）」である。しかも、その「生きた人間」というのは、誰でもこの世に生まれて今日まで生きてきたその「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などを内に宿している存在であるので、いろいろな分野の人たちといろいろな問題で親しく「言葉」を交わすことは、自分とはまた違った実に様々な「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、さらに様々な体験、経験、その他」などともめぐり逢うことになるとともに、それらからいろいろなことを学ぶことになり、それによって、とかく自分よがりの狭い独断的な考え方から、いろいろな角度から物事をとらえることができるようになるだろうし、また、何か知りたいことや疑問に思っているようなことがあれば、そのことをよく知っている専門家の人たちに直接聞けば、あれこれ丁寧に教えてもらえるものである。しかも、いろいろな人たちと直接的に交わされる「様々な言葉」（「生きた言葉」というのは、一般的に言って、お互いの「心の中」に直接的に入りやすいものであり、しかも、その言葉が心に染み入るような意味深い「生きた言葉」であれば、なおさらいつまでも、その人の「心の中」に保存されて生き続けることにもなるわけである。例えば、あの時のあの言葉が、あるいはあの時の誰々の言葉が、いつまでも「心の中」に残っていて、それが自分の人生に何らかの影響を与え続けているというようなことは、誰にもあることではないかと思う。

——以上が、われわれ人間が一般に行なっている他人との直接的な「対話（問答）活動」であるとともに、そこから得られるごく一般的な特徴（長所）ということになるかと思う。

三、本来の「哲学的問答法」

むろん、プラトンが考えている本来の「哲学的問答法」（ディアレクティケー）というのは、あくまでも物事の「真実・真理」（例えば「正義とは何か」「勇氣とは何か」「美とは何か」「善とは何か」、その他、それらの「真知」を得んがための徹底した「対話（吟味）活動」であり、それゆえ、一般的な「雑談や対談」のような「対話（問答）活動」とは、根本的に違ったものになるのだろう。しかし、その根底には、いつも他人との直接的な「対話（問答）活動」の全般（すべて）が存在していることになる。そして、その全般（すべて）の直接的な「対話（問答）活動」の（ピラミット型図形）の最上部に位置する「哲学的問答法」というものが成立するためには、少なくとも一方は、真に優れた「魂」を内に宿している人でなければならぬ。——なぜなら、お互いがまだ未熟な「魂」同士であるならば、いくらお互いが真剣に「対話（吟味）活動」を積み重ねても、いわゆる物事の「真実・真理」などをとらえる方向へと「その思考を真に深めていくこと」はできにくく、どうしても様々な事物の「表面的な現象」のところをさまようような、そういう中途半端な「対話（吟味）活動」で終わってしまうことが非常に多いからである。

つまり、真に優れた「魂」との直接的な「対話（吟味）活動」を何度も積み重ねることによってこそ、最初のうちは「無知」のような状態であった人も、相手の巧みな「話術（吟味）活動」に導かれて、その人自身だけではとてもそこまで深く入って行けないようなところまで、その「思考（思索）」を相手と一緒に深めていくことになり、そして、そのような親密な「対話（吟味）活動」を何度も積み重ねていく過程において、様々な物事の「真実・真理」（つまり「真知」）へと可能な限り近づいていくことになるとともに、その真

に優れた「魂」から絶えず生み出される実に様々な「生きた言葉」が、もう一方の話し相手の「魂の中」に蒔かれ、植えつけられることになり、そして、その「生きた言葉」の中に宿っていた「知識の種子」が、その人の「魂の中」でも芽を出し、成長して、やがてはその人の「魂の中」からも新たな「生きた言葉（知識）」などが生み出されてくるというように、心から心へ、魂から魂へ、「生きた言葉」や「生きた知識」、或いは「生きた思考方法」などが、可能な限り、正しく受け継がれていくものこそは、まさにプラトンが考えていた本来の「哲学的問答法」（ディアレクティケー）であるとともに、それこそは、まさに「最上（最善）のもの」であると考えていたものである。

例えば、ソクラテスやプラトンのような真に「優れた魂」と実際に親しく「対話（吟味）活動」を何度も積み重ねることによって、相手の実に様々な「生きた言葉」が自分の「魂の中」に自然と蒔かれ、植えつけられては、その「生きた言葉」の中に宿っていた「知識の種子」が、自分の「魂の中」でも芽を出し、成長して、やがては自分の「魂の中」からも新たな「生きた言葉（知識）」などが生み出されて来るようなものこそ、まさに「最上（最善）のもの」ではあるが、しかし、実際にはそのようなことはもうでき得ないわけだから、次善の策として、プラトンの書き遺した「書物」（それは生きた言葉や思想の「影」をじっくりと深く読むことによって、間接的にはあるが、彼らの「考えや思想」とめぐり逢い、そして、彼らの「考えや思想」（いわば「魂」と自分の「考えや思想」（いわば「魂」とが深く交わつては、こちら側からの一方的な形にはなるが、彼らの「魂」と哲学的な「対話（吟味）活動」を行なうことにもなるということであり、これも極めて「広い意味」においては、一つの「哲学的問答法」ということになるのかも知れない。

それゆえ、物事の「真実・真理」を得んがための「哲学的問答法」（ディアレクティケー）というものは、むしろ、優れた「魂」との直接的な「対話（吟味）活動」と、自分自身との「没我的思考方法」との両方を合わせ（合体させ）たものこそ、まさに最上なものであることは、すでに上述した通りである。それに加えて、例えば、様々な「書物」（例えば「哲学書」などを深く読んで、その優れた哲学者の「考えや思想」と深く交わることは、間接的ではあるが、その哲学者と愛読者との間に哲学的な「対話（吟味）活動」を生み出すことにもなるわけであるから、極めて広い意味においては、いわゆる「哲学的問答法」の一種になり得るものではないだろうか。——もちろん、本来の狭義においては、真に優れた「魂」との直接的な「対話（吟味）活動」こそは、まさに「哲学的問答法」になるわけだが、しかし、もっと拡大した広義においては、他の二者の場合も含めてよいものではないかと思う。——というのも、その拡大した広義の「哲学的問答法」こそは、われわれ人間が、日頃、物事の「真実、真理、その他」などを得るために実際に行なっている方法でもあるからである。

四、大学生の場合

例えば、ある大学生が、ある大学で「勉強（研究）活動」に励んでいるとする。その場合、その学生は、まず、様々な「講義」などに出席して、それぞれの担当の教授たちから、直接、いろいろな専門的な知識を学ぶことになる。そして、もしもその「講義」に出席して、その内容がよく理解できない部分や何か疑問に思っていることがあれば、直接、その

教授に質問をして、「この部分がよく理解できないんですが」と、自分がほんとうに理解できるまで何度でも質問を積み重ねては、それらの「疑問や問題点」などを解決しながら、その専門的な分野の理解などをより深めていくことになるかと思う。

そして、特に「演習（ゼミ）」の場合には、その指導の教授と学生との「関わり（交わり）」は、より親密なものになり、それゆえ、その「研究テーマ」に関わる様々な「問題点」などに対して、教授と生徒とが熱心に一問一答の「対話形式」で徹底的に「対話（議論）活動」を積み重ねながら、だんだんとその専門分野の知識や技術などをより深めていくことになるかと思う。そのように物事の「真実・真理」などを得んがために、教授（先生）と生徒（学習者）とが親しく「対話（議論）活動」を何度も積み重ねることによってこそ、生徒は、その「思考（思索）能力」をより深めることになるとともに、いわゆる「真知」を愛し求める愛知者同士の間には、自然と人間的な「親密さやつながり」なども生じて来るというのが、プラトンが考えている「哲学的問答法」というものになるわけである。

——つまり、真に優れた「魂」とめぐり逢い、その真に優れた「魂」と親しく「対話（議論）活動」を何度も積み重ねることによってこそ、相手の実に様々な「生きた言葉」が自分の「魂の中」にも自然と蒔かれ、植えつけられては、その「生きた言葉」の中に宿っていた「知識の種子」が、自分の「魂の中」でも芽を出し、成長して、やがては自分の「魂の中」からも新たな「生きた言葉（知識）」などが数多く生み出されるようになる。そのようなものこそ、ソクラテスという先生からプラトンという生徒が直接、身を以って学んだ、いわゆる「哲学的問答法」であつたとともに、そのようなものこそは、まさに「最上（最善）のもの」である、と、プラトンは考えているわけである。

次に、その大学生は、当然のことながら、自分が研究している「分野」（つまり「研究対象」）に関する実に様々な「専門書」（資料）などを数多く読みあさることになるかと思う。そして、「書物」を読むということは、確かにいろいろな知識を得るためのものではあるが、それと同時に、その作者の「考えや思想」（いわば「魂」と深く交わることもあり、そして、その作者の「考えや思想」（つまり「魂」とそれを読む読者の「考えや思想」（つまり「魂」とが深く交わり、読者の「心の中」であれこれ「対話（吟味）活動」を行なうような形にもなるものである。むしろ、生きた人間との直接的な「対話（吟味）活動」こそは、第一ではあるが、しかし、一方、様々な「書物」との「関わり」（交わり）も決して軽く見ることはできないのである。——なぜなら、どのような人間とめぐり逢い、そして、その人たちからどのような影響を受けるかは、その人の人生に計り知れないほどの大きな影響力を持つものであるのとまったく同じように、どのような書物とめぐり逢い、そして、それらの書物からどのような影響を受けるかは、その人の人生に計り知れないほどの大きな影響力を持つものであるからである。

つまり、真に優れた「魂」こそは、第一のものではあるが、しかし、その真に優れた「魂」から生み出された真に優れた「書物」というものも、決してそれに劣らないくらい真に優れた「第二（或いは第三）」のものとなり得るものである。それゆえ、真に優れた「魂」との直接的な「対話（吟味）活動」こそは、第一の「哲学的問答法」であるとすれば、真に優れた「書物」（その中に宿る「魂」との間接的な「対話（吟味）活動」こそは、まさに第二（或いは第三）の「哲学的問答法」ともなり得るものではないかと思う。

それは、ソクラテスやプラトンのような真に優れた「魂」と親しく交わることによって、

相手の「生きた言葉」が自分の「魂の中」にも自然と蒔かれ、植えつけられては、その「生きた言葉」の中に宿っていた「知識の種子」が、自分の「魂の中」でも芽を出し、成長して、やがては自分の「魂の中」からも新たな「生きた言葉（知識）」などが数多く生み出されて来るようなものこそ、まさに第一の「哲学的問答法」であるとすれば、プラトンのような真に優れた「魂」によって生み出された様々な「書物」などと深く交わることによって、そこに書かれている言葉が自分の「魂の中」に様々な「考えや知識」として蒔かれ、植えつけられては、それらが次第に「成長・成熟」してきて、やがては自分自身の「心の中」からもいろいろな新しい「考えや知識」などが数多く生み出されるものこそは、まさに「第二」（或いは第三）の「哲学的問答法」ということにもなるということである。

そして、もう一つが、いわゆる自分を相手にしての「対話（吟味）活動」であり、それが、まさに「第三」（或いは第二）の「哲学的問答法」となり得る自問自答による「思考（思索）活動」である。そして、その自分を相手にしての「対話（吟味）活動」（つまり「自問自答」というのは、誰でもその人の「頭の中」（或いは「心の中」）で実際に行なっているものではあるが、しかし、その場合、若しもその人がまだ未熟な「魂」であるならば（むろん、若い時は誰でも未熟な「魂」であるしかないが）、その人がいくら自分自身でものを深く考えようとしても、それには自ずと限界があるだろう。——つまり、自分だけの「思考（思索）活動」だけでは、どうしても物事の「真実・真理」などを厳密にとらえることも、また、物事を深く考え深めることもできない。それゆえ、そのようなまだ未熟な若い「魂」にとっては、どうしてもそれを導いてくれる相手がぜひとも必要になつて来るわけである。そして、その「導き手」となってくれるものこそは、まさに真に優れた「魂」であり、また、真に優れた「書物」である、ということである。

むろん、何も真に優れた「魂」や「書物」だけに限る必要などどこにもないではないか、という反論が当然生じて来るだろう。確かに、われわれ人間は、いろいろな人たちとあれこれ「対話（吟味）活動」（つまり「話」）をすることによって、実にいろいろなことを学ぶことになるとともに、例えば、新聞、雑誌、書物、その他の「活字」などを読んだり、また、テレビやラジオ或いはインターネットなどを見聞きすることによって、実に様々な「情報や知識」などを得ることにもなるわけである。そのように、われわれ人間というのは、誰でもいろいろな人たちと話をしたり、また、いろいろなものを見聞き読んだりして、実に多くのことを学ぶことになるわけである。そして、そのような日々の積み重ねによってこそ、われわれ人間の「内的世界」というものは、次第に「拡大・拡充」されていくことになるのである。それゆえ、そのようなことも極めて大事なことであるというよりは、むしろわれわれ人間がまさに人間らしく「成長・成熟」するためには、どうしても必要不可欠な極めて大きな「基盤」となるものである。

しかし、そのような一般的な「対話（吟味）活動」や一般的な「書物」だけでは、どうしてもその人の「魂の眼」を「上の方へと十分に上昇させる」ためには、必要かつ十分とはなり得ないものである。なぜなら、そのようなものの多くが、われわれ人間の「魂の眼」を「現実界」の実に様々な「欲望や感情の方向」や様々な出来事の「現象的な興味」へと向けさせるものであるからである。それをプラトン風に言えば、絶えず変化する雑多な現象（事物）へと目を向けさせ、一方、恒常不変のあり方を保つ（イデア）を覷て取る（「観照できる」）方向へと、なかなか導いてはくれないものだからである。それでは、何がそ

のような方向へと導いてくれるものかと問えば、それこそは、まさに真に優れた「魂」や真に優れた「書物」などであるということになるのである。

例えば、その人の「思考（思索）能力」がまだ未熟な状態であれば、その人がいくら一生懸命に「自問自答」をしてものを考え深めても、物事の「真実・真理」などを厳密にとらえることは、なかなかできにくいだろう。それゆえ、例えば、ソクラテスやプラトンのような真に優れた「魂」と親しく「対話（吟味）活動」などを行なうことによってこそ、その人自身の「思考（思索）活動」だけでは、とてもそこまでは深く入って行けないようなところまで、その真に優れた「魂」に導かれて、一緒にその「思考（思索）活動」を深めていくことになるのである。そして、そのような親密な「対話（吟味）活動」を何年も積み重ねていくことによってこそ、その人自身の「思考（思索）能力」も真に鍛えられ、真に育て上げられることにもなるわけだ。——それは、真に優れた「書物」との「深い交わり」の場合でも、全く同じことが言えるのであり、その「優れた書物」の内容をできるだけしっかりと理解しながら前に読み進んで行くことによって、その人自身の「思考（思索）能力」だけではとてもそこまでは深く入って行けないようなところまで、その「優れた書物」（その中に宿っている魂）に導かれて、その人自身の「思考（思索）活動」をより深めていくことになるわけである。そして、そのようにして「優れた書物」を読み進んでいくうちには、どうしてもよく理解できない部分や疑問に思うようなところがあちこちに出てくることになる。そうなると、そこで立ち止まって、何度もその部分を何とか理解しようと読み直すことになり、それでも思うように理解できなければ、その部分は飛ばして先に読み進んでいくことになるかと思う。そして、そのような箇所がいくつも出てきて、その人の「頭の中」にはよく理解できない部分や疑問に思うようなことなどが自然と数多く蓄えられるようになるわけである。そうなると、そのことがどうしても気になっているので、いろいろな折りに、そのことを想い出しては、「……あれは、一体、どういう意味なんだろうか？」、あるいは、「……あれは、一体、どういふことなんだろうか？」と、あれこれ自問自答を繰り返すことになるかと思う。そして、そのような「心的状態」になることこそは、最も大事なことであり、真に優れた「書物」を深く読むという本来の「読書」というものがもたらす最大の長所でもあるわけである。

なぜなら、そのような「心的状態」こそは、現実的な「様々な欲望や快楽その他」などを得んがために行なわれる「思考（思索）活動」とはまったく違って、まさに「真知」を愛し求め、それを得んがために「自らものを考えている」という「純粹思考」（純粹思惟）を行なっている「心的状態」であり、そのようなことを何度も繰り返すことによってこそ、その人自身の「思考（思索）能力」が真に鍛えられ、育っていくものだからである。そして、そのようなことを何年も積み重ねることによってこそ、やがて、その人も最初は極めて未熟な「思考（思索）能力」でしかなかった状態から、次第に物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを、その人なりにとらえることができるようになっていくということである。そして、そのような方向へと導いてくれるものこそは、まさに真に優れた「魂」や真に優れた「書物」などであるということになるわけである。

もちろん、われわれ人間は、誰でも「自問自答」という「思考（思索）活動」を行なっているものである。しかし、一般的な「思考（思索）活動」（つまり「自問自答」）では、なかなか物事の「真実・真理」などを厳密にとらえることはできにくい。それでは、一体、

どうすればよいのかと言えば、それには、どうしても自分自身の「思考（思索）能力」を真に「成長・成熟」させなければならず、そのためには、やはり真に優れた「魂」や真に優れた「書物」などと深く交わって、いわゆる「上の方へと導かれる」ことを何年も積み重ねることによってこそ、初めて、その人自身の「思考（思索）能力」も真に鍛えられ、育っていくことになるわけである。そして、その真に鍛えられ、育てられた「思考（思索）能力」をもって、一方では、できるだけ「論理的（知性的）思考」を無限に積み重ねながらも、もう一方では、いわゆる「没我的思考状態」（つまり「沈想」状態）に深く溶け入っては、独りぼんやりと「物想い」（或いは「空想」）を楽しんでいる「心的状態」になっっているような時にこそ、まさに「精神の飛翔」というようなものが生じてきて、ある「難題」について、今まで無限に積み重ねてきた、いわゆる「論理的（知性的）思考」だけではどうしても越えられなかった「行き詰まり」状態を超えて、ある日、ある時、思いもかけないような感じで、或る「真実・真理」を突然として「直知・直観」することになるとともに、われわれ人類が得てきた実に様々な「真実・真理」というものは、まさにそのようにしてとらえられたものが非常に多いかと思う。——それゆえ、真に優れた「魂」との対話、真に優れた「書物」との対話、そして、真に成熟した「自分自身」との対話、これら「三つのもの」が、いわば一体となつて、実際には物事の「真実・真理」などをとらえることになるとともに、それこそは、今日の物事の「真実・真理」を得んがための「哲学的問答法」ということになるのだろう。（むろん、物事の「真実・真理」などを直接とらえるのは、言うまでもなく、自分自身との「対話」によってではあるが。）

五、車の両輪

例えば、「美のアイデア」というのは、ある日、ある時、（突如として）観て取られるというような表現があるが、それも今まで積み重ねてきた無限の「論理的（知性的）思考」というものをしっかりと踏まえながらも、それだけではどうしても越えられないものがあり、その越えられないものを越えるためにも、自問自答による「没我的思考方法」（つまり「沈想」状態）に深く溶け入っているような時にこそ、いわゆる「精神の飛翔」というようなものは生じやすくなり、ある日、ある時、思いもかけないような感じで、（突如として）観て取れるものであり、それゆえ、そこには何か「論理的（知性的）思考」方法を超えるような、ある種の「超論理的（超知性的）思考」方法が存在し、それこそは、まさに物事の「真実、真理、その他」などを直接的にとらえる、いわゆる「直知・直観」というものになるということである。

むろん、そこで得たものが、いつも本物の「真実・真理」であるかどうかは分からない。時にはただ単なる「空想」（或いは「妄想」）に過ぎないものもあるかも知れない。それゆえ、再び、そこで得たものを極めて厳密に「吟味（検討）」し直してみるという「論理的（知性的）思考」活動が、どうしても必要不可欠になって来るわけである。それゆえ、いわゆる「論理的（知性的）思考」活動と「没我的思考」活動とは、もうお互いに切っても切れない「車の両輪」のようなものであり、その両者は、お互いに交互に活動をしているものであり、一方の「論理的（知性的）思考」活動で行き詰まれば、それを「没我的思考」活動で打開し、それによって得たものは、再び、「論理的（知性的）思考」活動によ

って、厳密に「吟味（検討）」し直されるといふことの「連続」（つまり「繰り返し」）によつてこそ、やがては「最終的な地点」へと向かつていくわけであるが、その「最終的なもの」（つまり物事の「真実・真理」）などを直接とらえるのは、どちらかと言えば、やはり「没我的思考」活動（つまり「沈想」状態）に深く溶け込んでいるような「心的状態」になっている、そのような時にこそ、まさに「精神の飛翔」というようなものは生じやすくなり、それゆえ、ある日、ある時、思いもかけないような感じで、何か人類的な「難題」などが一気に解決できるような決定的な「考えやヒント」などを得たり、あるいはその人の「思惟界」で或る物事の「真実、真理、その他」などを観て取るといふ、いわゆる「直知・直観」といふものが生じることが非常に多いということである。

つまり、長い階段を一步一步上つていき、そして、最後のところで或る「真実・真理」を得るといふ「論理的（知性的）思考」方法だけでは、どうしても越えられない「行き詰まり状態」に陥ってしまうことが非常に多いわけである。そこで、どうしても越えられないその「行き詰まり状態」を打開し、突破していくものが、まさにもう一つの「思考（思索）方法」である自問自答による「没我的思考」であり、その「没我的思考」に深く溶け込んでいるような時にこそ、いわゆる「精神の飛翔」というようなものは生じやすくなり、ある日、ある時、思いもかけないような感じで、その人の「思惟界」で或る「真実、真理、その他」などを、まさに「直知・直観」することにもなるのである。

六、智を生めない者

例えば、ソクラテスは、いつも「行き詰まり状態」に深く陥って、身動きできないような「心的状態」だったのだろうか？ もちろん、そうではないだろう。なぜなら、ソクラテスは、例の「没我的思考」方法によつて、誰よりも深く「沈想（瞑想）状態」を経験し、実践していた人だからである。それでは、ソクラテスは、なぜ、自ら積極的に様々な「知識」を生み出そうとはしなかったのだろうか？ その理由については、『テアイテトス』という著作のなかで、次のように明言している。「……すなわち僕は智を生めない者なのだ。そしてそれはすでに多くの人たちが僕に非難したことなのであるが、僕は他人には問いかけるが、自分は、何の知恵もないものだから、何についても何も自分の判断を示さないというのは、いかにも彼らの非難のとおりである。これにはしかし次のような子細がある。僕は取上げの役の方をしなければならんように神が定め給うているのだ。そして生むことはしないようにこれを封じてしまわれたのだ。だから実際のところ、僕自身ちつとも知恵のある者なんかではないし、また僕には、僕自身の精神から出生したというもので、そんな知恵のある発見は何もないしだいなんだ。ところが、僕と一緒にいる者、僕と交わりを結ぶ者というとはじめこそ全然無知であるに見える者もないではないが、しかしすべては、この交わりが進むにつれて、その人々に神がそれを許し給うならば、その者自身の見るところによつても、また他人に思われるところによつても、驚くばかりの進歩をすることは間違いないのだ……」（『テアイテトス』34A～B）

例えば、晩年のソクラテスは、老若男女を問わず、もうありとあらゆる分野の人たちと人間の「諸問題」について積極的に「対話（吟味）活動」を行なうことをいわば毎日の日課のようにしていたわけであるが、そのなかでも特に若い人たち（青年たち）と好んで「対

話（議論）」を行なうような傾向が強かったかと思う。そのような場合、つまり、若い人たち（青年たち）といろいろな問題で「対話（議論）」を行なうような時には、ソクラテス自身にとつて、そこで議論される「様々な問題」などは、すでにもう何度ともなくソクラテスの「頭の中」（或いは「心の中」）で徹底的に「吟味（検討）」されていたものばかりになるだろう。だとすれば、まだ「知的能力」の未熟な若い人たち（青年たち）とあれこれと「対話（議論）」を行なうことによって、ソクラテス自身、彼らから何かびつくりするような新しい「知識や智慧^{ちえ}」などが得られることは、極めて少なかっただろう。

それでは、ソクラテス自身は、一体、どこで自分自身の「思考（思索）」を深めていたのかと問えば、それこそ、まさに例の「没我的思考」方法（つまり自分自身との徹底した「哲学的問答法」）によつてこそ、その「思考（思索）活動」をどこまでも深めていたということである。つまり、晩年のソクラテスが、若い人たちと好んで哲学的な「対話（吟味）活動」を行なっていたのは、何もそこから何か新しい「知識や智慧^{ちえ}」などが得られるからではなく、むしろ、若い人たちの「心の眼」を目覚めさせるためのものだったということである。つまり、人間としてまさに心身ともに成長し、でき上がっていく若い人たちの、その「内的世界」をほんとうに「育て上げる」ためには、あれこれの知識を直接、教えるのではなく、それでは、若い人たちは、ただ「正義とはこうである」という「知識」だけを受け取って、自らは、少しも「何も考えない」ことになってしまふだろう。

それでは、若い人たちの「思考（思索）能力」は、少しも「成長・成熟」していない。それゆえ、むしろ一緒に様々な「人間の諸問題」についていろいろな角度から徹底的に考え深めていくという方法によつてこそ、その人の「思考（思索）能力」を真に鍛え、育て上げることができ得るとともに、その人自身、自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう精神の自立した一人の人間になるようにと、ソクラテスは、いわゆる「対話（吟味）活動」（つまり「哲学的問答法」）を用いて、まさに「産婆術」を実践していたということになるということである。

それでは、なぜ、ソクラテスは、そのようなことをするようになったかと言えば、それは、もちろん、ソクラテス自身、もともと若い人たち（青年たち）とあれこれ「対話（議論）」をすることが好きであつたからだろうし、また、いわゆる「教育者的資質」をその内面に持ち合わせていたからということにもなるのだろう。しかし、それらだけでは恐らく、晩年のソクラテスが実際に行なっていたあの徹底した「対話（吟味）活動」へは、まっすぐに直結するものではない。それでは、それらに何がつけ加わったからこそ、あのようなソクラテスの徹底した「対話（吟味）活動」へとなつて行つたのだろうか？ それは、言うまでもなく、例の「デルポイの神託」の「謎解き」の結果ではあるが、それは、「ソクラテスより知恵のある者は誰もいない」という、いわゆる「デルポイの神託」の謎かけの真意は、一体、何なのか、それをぜひとも解明したいと思ひ、長いあいだ、ソクラテスは考えあぐねた末に、次のような「ある考え」がふと浮かんでくるわけである。

それは、自分よりも知恵のありそうな人をたずねては、ほら、この人の方が自分よりも知恵があるじゃないかと、神託に反駁することだつたわけである。そこで、ソクラテスは、政治家をはじめ、いろいろな分野の「知者」たちをたずね歩くことになるが、その場合、相手の人が間違ひなく自分よりも「知者」であるという確たる証拠が得たいわけであるから、当然のことながら、相手との「対話（吟味）活動」は、極めて徹底したものにならざ

るを得ないだろう。ここにこそ、ソクラテスのまさにあの徹底した「対話（吟味）活動」の第一歩が踏み出されたとともに、例の「デルポイの神託の真意」がはっきりとわかった時点からは、ソクラテスは、老若男女を問わず、もうありとあらゆる分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行なうように心がけ、そして、若しも相手の人が「知者」でもないのに、「知者」だと思い込んでいるようならば、そうではないのだと相手の「無知」（様々な「思い違い」など）をはっきりと自覚させるような活動こそ、まさに「デルポイの神託の真意」であるとともに、「神からの絶対的な命令」であると考えて、極めて意識的に行動（つまり「哲学の実践」）を行なうようになったということである。

それが、すなわち、朝早くから遊歩道や体育場、また、人が多く集まる広場（市場）や街頭、その他、もういたるところに出かけて行っっては、一日じゅう、いろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行なうことを、いわば毎日の日課のようにする最大の理由になるわけである。――つまり、「デルポイの神託の真意」がはっきりと分かった時点からは、むしろ、それ以前からもういうことは行なっていただろうが、しかし、「デルポイの神託の真意」がはっきりと分かった時点からは、まさに「神からの絶対的な命令」という極めてはっきりとした使命感を持って、ソクラテスは、意識的に「真実・真理」の探究のためだけではなく、それに加えて、対話相手の「無知」（様々な「思い違い」など）をはっきりと自覚させるためにこそ、まさにその「対話（吟味）活動」（つまり「哲学的問答法」）というものをフルに活用したということである。それが、すなわち、アテナイ人の「心の眼」をいつも目覚めさせておくために、神によってこの国都^{ポリス}に付着されられた「アブ」のような役割をしていた、ソクラテスということになるわけである。

七、結び

話が大きくそれてしまったが、ソクラテスには、次の二つの「思考（思索）方法」があったということである。その一つは、非常によく知られているいろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行なうソクラテスの姿であり、そして、もう一つは、逆に、他人から完全に離れて（つまり他人を全く寄せつけずに）、孤独^{ひとり}立ったまま「思考（思索）活動」に耽入するという例の「没我的思考方法」（つまり「沈想」状態）である。むしろ、この二つのものは、決して別々のものではなく、むしろ他人との「対話」と自分自身との「対話」、この二つのものが、まさに「車の両輪」のように切っても切れないほど極めて親密な関係で相乗作用をもたらしながら、ソクラテス自身の「思考（思索）活動」をより深め、促進させていたとともに、まさにソクラテス自身が実際に行なっていた物事の「真実・真理」を得んがための「哲学的問答法」であったということになるわけだ。――そして、プラトンを初めとして、今日の私たちが実際に行なっているのが、他人との「対話」、書物との「対話」、そして、自分自身との「対話」、これら三つのものがその人の「頭の中」（或いは「心の中」）でいわば一体となつて（つまりお互いに協力し合つて）、物事の「真実・真理」を得んがための「哲学的問答法」というものになっているのである。

*

*

ソクラテスの「物想い」

ソクラテスの「物思い」について

さて、ソクラテスには非常に有名な「物思い」（つまり「没我的思考」）というものがあるが、それは、いわゆる『饗宴』という著作のなかに出てくるものであり、その部分をもう少し引用しておきたいと思う。

それは、ソクラテスが北部バルカンの都市ポティダイアの包囲戦に出征した時の話である。「……話というのは、こうだ。あるとき、彼は思索にふけり、朝早くから同じところに立ちつづけて、なにかを考えていた。けれども考えがうまくすすまないで、途中で投げださずに探求しつづけて立っていたのだ。

ときは、すでに午（ひる）になって、これに気づく人々が出てきた。彼らはげげんに思い、ソクラテスが朝早くからなにか思いをめぐらして立ちつづけているぞ、と人ごとに話しあっていた。——ところが、ついに夕方になってしまったこととて、食事のあと、イオニアの隊に属するある兵士らが、そのときは夏の陣だったので、藁（わら）ぶとんを外にもち出し、涼しい外気のなかで寝ながら、はたしてこの人が一晩じゅう立ちつづけるかどうかを見張っていたものだ。しかし、晩がおとずれ、太陽が上がるまで、彼は立っていたのだ。それから、太陽にむかって祈りをささげ、去っていった。……」とある。『饗宴』219C～D)

さて、この有名な「逸話」（エピソード）が、もし本当のことだとすれば、当時三十七歳であったソクラテスは、ある時、朝早くからずつと立ちつづけ、そして、翌朝の太陽が昇るまでの約二十四時間（丸一日）、ずつと同じところに立ちつくして、何か「物思い」に耽（ふけ）っていたことになる。これは、ふつう誰がどう考えても確かに極めて長い時間にわたっての「物思い（沈想）」ということになるかと思う。しかも、ソクラテスの場合には、それほど長くなくても、何時間も、いわゆる「物思い（沈想）」に耽（ふけ）入るといふことが度々（たびたび）あったということである。

それでは、なぜ、ソクラテスにはそのような長い「物思い（沈想）」というものがあつたのだろうか？ この問題について、もうすこし考えてみたいと思う。

例えば、誰でも、多かれ少なかれ、ある時、ある場所で、自分でも思いがけないような感じで、ふと或る「考えや想い」などが浮かんできるとはよくあることだと思う。しかも、ソクラテスのように、実にいろいろな分野の人たちと好んで「対話（吟味）活動」を行なっているような人であれば、彼の「頭の中」には、いわゆる「人間の諸問題」についての実に様々な「疑問や問題点」などがいつも内在していたことになるだろう。

それは、例えば、どういう分野の学者であっても、その人が真剣に取り組んでいる「研究」対象についての様々な「疑問や問題点」などが、いつもその人の「頭の中」に内在しているのと全く同じことである。そして、そのようにいつも様々な「疑問や問題点」が内在している状態の「頭の中」に、ある時、ある場所で、自分でも思いがけないような魅力的な「考えや想い」などがふと浮かんできた時には、われわれは、一体、どうするだろうか？ むろん、それは、人によってそれぞれ違ってくるだろうが、ふつう自分でも思いがけないような魅力的な「考えや想い」などがふと浮かんできた時には、それがたとえトイレの中でも、風呂の中でも、また、道を歩いている時でも、電車の中でも、あるいは夜中、床の中に入っている時でも、その他、それはもうどのような場所や時間であっても、もしその人にとって極めて魅力的な「考えや想い」などがふと浮かんできた時には、その

場所や時間のことよりも、その極めて魅力的な「考えや想い」などの方により心を奪われているような状態になるのではないかと思う。

例えば、何らかの学者や研究者の人が、長い間、真剣に取り組んでいるながらも、どうしても解けずにいた「研究」対象の「難題」などがぱっと解けるような、自分でも思いがけないような「考えや想い」などがふと浮かんできた時とか、あるいは文学者や芸術家などが、自分でも思いがけないような魅力的な「作品の着想やヒント」などを得た時など、自分でも思いがけないような感じでふと浮かんできた或る「考えや想い」などが、その人にとつて極めて「魅力的なもの」であればあるほど、自分が今いる場所や時間のことなどよりも、その思いがけない「考えや想い」などを忘れないためにも、できるだけ早く何かに書き留めておきたいという「強い衝動」にかられ、自分の身のまわりに何か「筆記具」か何かないかと捜しまわり、できるだけ素早く書き留めておこうという「行為（行動）」をとることは、よくあることではないかと思う。

それゆえ、ソクラテスも、もし文章を書くような人であれば、恐らく、そのようにしたに違いない。しかし、ご存知のようにソクラテスという人は、一生涯、自分の「頭の中」だけでものを考えるようなタイプの人であり、確かに「書かれたもの」（書物）を読むようなことはあったであろうが、しかし、文章を書きながらものを考えるというようなことは、ほとんどしなかった人である。それゆえ、ソクラテスにとつて、ある時、ある場所で、自分でも思いがけないような魅力的な「考えや想い」などにふと襲われた時に、ふつうであれば、それを何かに書き留めておいて、あとでじっくり考えるということもできただろう。しかし、ソクラテスの場合には、そういうことをほとんどしない代わりに、その場に立ち止まり、そして、彼の「頭の中」だけで自分でも思いがけないような感じでふと襲われたその魅力的な「考えや想い」などをもとにして、どんどん考えを深めていくということを行なっていたことになる。それが、まさにソクラテスの何時間も続く「物想い（沈想）」ということになるのだろう。

それでは、なぜ、その場に立ち止まって「ものを考える」のだろうか？ 家に帰ってからもよいではないか、という人もあるかも知れない。しかし、ある魅力的な「考えや想い」などにふと襲われた時こそ、まさにそのことを考えるのに「最適の時」なのである。つまり、そのことを考えるのに最も適した「頭の状態」（つまり「思考状態」）になっていることである。それゆえ、もし家に帰ってからという「時間の経過」を経てしまうと、せっかく魅力的な「考えや想い」などに襲われ、そのことを考えるのに最適の「頭の状態」（つまり「思考状態」）だったものとは、すっかり変わってしまうことが非常に多いわけである。しかも、ソクラテスのように「頭の中」だけでものを考えるというタイプの人であれば、その場でしっかりと考えておかなければ、あとでは忘れてしまう危険性も多分にあるわけである。それでは、忘れない程度に考えておき、あとは家に帰ってから徹底的に考えたらよいではないかという人もあるかも知れない。しかし、ソクラテスという人は、ひとたびものを考えはじめると、彼の「頭の中」だけでどんどん物事を考え深めていき、そして、ソクラテス自身、もうここでよいだろうと納得のいくような何らかの「結論（いわば最終地点）」にまで達するまでは、途中で（つまり中途半端な状態のままで）考えることをやめるといふことができなかった、そういう非常に「精神の集中力」の強い人だったということである。だからこそ、なかなか思うように考えが進まないような時に

は、非常に長い「物思い（沈想）」になることも多かったわけである。

そして、ソクラテス自身、もうこれでよいだろうと納得のいくような何らかの結論（いわば最終地点）にまで達したならば、そこでもうすべてが終わるのではなく、それに加えて、彼の「頭の中」に何らかの形で「記憶保存」するというを行なっていたに違いはない。それは、例えば、「将棋」や「囲碁」などを専門に行なっているプロの人たちであれば、自分が「対局」した「将棋」や「囲碁」は、最初から最後までよく覚えていて、「対局」が終わったあとで、もう一度、それを思い出しながら、その「対局」のどこがどうだったという反省ができるわけである。もちろん、だからと言って、何年も何十年にも渡った数多くの自分の「対局」のすべてを、一つ残らず覚えていっているのではない。もちろん、そうではない。ただ、かなりの量の「対局」をかなり正確に覚えていっているものである。それと同じように、ソクラテスの場合にも、何かに書き留めておくということをほとんどしなかった人であれば、彼の「頭の中」では何らかの方法で記憶を保存するというを行なっていたに違いはない。そうでなければ、大事なことも何でもほとんど忘れてしまうことになるからである。それを何とかくい止めるための何らかの「記憶力の訓練」（つまり「記憶術」）をしつかりと身につけていたと考える方が、遙かに自然で無理のない考え方になるのだろう。少なくとも今日のわれわれよりは、遙かに「記憶力のよかった人」であったことに間違いはないだろう。

つまり、ある時、ある場所で、自分でも思いがけないような魅力的な「考えや思い」などにふと襲われた時に、ソクラテスは、その場で立ち止まり、そして、その思いがけないような「考えや思い」などをきっかけとして、ひとたび真剣に物事を考えはじめると、彼の「頭の中」だけでどんな物事を考え深めていき、そして、もうここでよいだろうと、ソクラテス自身、納得のいくような何らかの「結論（いわば最終地点）」にまで達しない限りは、中途半端なところで考えることをやめるということができないという、そういう非常に強い「精神の集中力」を持つていたということである。だからこそ、なかなか自分の思うように考えが進まない時には、どうしても非常に長い「物思い（沈想）」になることも多かったのだろう。そして、そのような長い「物思い（沈想）」の結果、これでもよいだろうと、ソクラテス自身、納得のいくような何らかの「結論（いわば最終地点）」にまで達したならば、それでもうすべてが終わるのではなく、恐らく、もう一度、最初から最後まで「物思い（沈想）」をじっくりと思い出しながら、いわゆる「再確認」（再認識）をし、そして、ソクラテス自身、何らかの意味で必要かつ大事だと思われることは、彼の「心の中」のいわば「記憶保存室」の中に忘れないようにしっかりと蓄えておくことを行なっていたに違いない。そうでなければ、せっかく考えたことや大事なことも、どんどん際限なく忘れてしまうことになるからである。

それでは、なぜ、ソクラテスは、「立った」まま考えたのか、「坐って」考えてもよかったのではないかという素朴な疑問が生じるかも知れない。もちろん、今日のわれわれであれば、「立ってでも、坐ってでも、どちらでもよい」のだろうが、しかし、ソクラテスやプラトンなどの「考え方」のなかには、いわゆる「頭」の位置を少しでも上にすることは、すなわち、それだけ「天（或いは神）」により近づいた状態になるという考え方があって、それゆえ、「天（或いは神）」により近づいた状態でものを考える方がよりよいということになるのだろう。また、ソクラテスという人は、非常にからだの丈夫な人だった

ので、一日じゅう立っけていても、今日のわれわれほどには疲れなかったのかも知れない。また、ソクラテスのようにじつと立ったままものを考えていたら、多くの人たちの目に付いて、がやがや騒がれて、ものを考えるにはかえって不向きではないかという疑問が生じるかも知れない。もちろん、そういう他人の目やがやとした騒ぎにならないように、できるだけ人目を避けた場所に身を移してから、本格的に考えはじめるということを行なっていたのだろう。しかし、ひとたび物事を真剣に考えはじめると、もうまわりのことや時間のことなどはそれほど気にならず、とにかく、これでよいだろうと、ソクラテス自身、納得のいくような何らかの「結論（いわば最終地点）」まで行かなければ、気がすまないという、そういう非常に強い「精神の集中力」を持った人であり、それゆえ、物事を真剣に考えはじめると、まさに「没我的状態」に深く陥ってしまい、まわりのことや時間のことよりも、物事をどんどん考え深めていくということに取り憑かれてしまうという、そういうタイプの人だったということである。

それに加えて、大事なことは、ソクラテスの「物想い（沈想）」というのは、いわゆる「ダイモンからの合図」とはまったく違うということである。というのも、例の「ダイモンからの合図」というのは、いわゆる「禁止の合図」であって、ソクラテスが何らかの「行動（言動）」をしようとする時に、「それはしてはいけない」という感じで、彼に聞こえて来るものであり、それゆえ、今、しようと思っていることをやめて、何か別の「行動（言動）」を行なえば、それでよいことであり、何時間もずつと立ったまま「物想い（沈想）」に耽入するということは、かえって不自然なことになるからである。それゆえ、もしも例の「ダイモンからの合図」があるとすれば、それは、むしろ「物想い（沈想）」の状態に入っている時に、ソクラテス自身、まだこれという納得のいくような「結論（いわば最終地点）」にまで到達していないのに、もうこの辺でよいだろうと、中途半端なところで考えることをやめて、その場から離れようとした時にこそ、まさに例の「ダイモンからの合図」（つまり「神からの合図」）が聞こえてきて、それゆえ、その場から立ち去ることができず、ソクラテス自身、もうこれでよいだろうと納得がいくような「結論（いわば最終地点）」まで考え続けることになっただろう。それゆえ、ふと立ち止まって「物想い」に耽入するというのは、いわゆる「ダイモンからの合図」とはまったく違うものである。

つまり、ソクラテスの「頭の中」には、いわゆる「人間の諸問題」についての実に様々な「考えや疑問」などがいつも内在していて、そして、ある時、ある場所で、自分でも思いがけないような感じで、ふと或る「考えや想い」などに襲われた時にこそ、その場で立ち止まり（その場合、むしろ道からそれて人目を避けたり、また、ものを考えるのによい場所に身を移してから）、例の「物想い（沈想）」に耽入ことになるのだろう。それゆえ、例の「物想い（沈想）」に耽入するのは、ソクラテス自身、意識的に「さあ、これからある問題について考えよう！」と思って考えはじめる場合とは少し違って、あるいはそういう場合もあったかも知れないが、むしろ、ある時、ある場所で、ソクラテス自身にとっても思いがけないような感じである魅力的な「考えや想い」などにふと襲われた時にこそ、例の「物想い（沈想）」に深く耽入することが多かったのだろう。

それゆえ、ソクラテス自身、ある問題についていろいろな分野の人たちと積極的に「対話（吟味）活動」を行なっては、お互いに議論を深めていくような場合とは違って、例の「物想い（沈想）」というのは、まさにソクラテス自身の、いわゆる「自問自答」という

ことになるかと思う。また、人によっては、あの「物思い（沈想）」というのは、例えば、「神からの命令」を受けているとか、あるいは「神と対話」をしているというような考え方もあるそうであるが、なにも特別そのように考える必要はないだろうと思う。というのも、こういうことは、誰にでも、多かれ少なかれ、その内容や質の問題などはあるにしても、自分でも思いがけないような感じで、ふとある「考えや想い」などに襲われることはよくあることで、それを何か特別のように考える必要は特にないだろうと思う。

*

*

「参考文献」

※底本「世界の名著プラトンⅠ」（中央公論社）

※底本「パイドロス」藤沢令夫訳（「岩波文庫」）